

金太郎

宮田 登

「金太郎飴」といえば、最近のレトロブームで復活してきた懐かしい棒状の飴で、どこを切りとつても、あの特徴的な金太郎の顔が表われてくる。童髪でどんぐり眼まなこのいかにも腕白坊主といった表情を飴の断面に浮かび上らせるテクニクは、江戸から明治に入って出来上ったもので、手のこんだ技術を代々伝えている職人が東京にはまだ残っている。

童謡の「金太郎」が世間に流布したのは、明治三〇年のことで、小学校唱歌の一つに採用されたことから、馴染深い歌の文句が、全国でうたわれるようになってきた。金太郎のモデルは平安時代中期の武将坂田金時であり、源頼光の四天王の一人として活躍して、すでに『今

昔物語』巻二八などにも登場している。彼の幼年・少年時代、元服する以前の腕白ぶりが痛快に描かれたお伽噺は、やはり明治三〇年代に評判となった。これはもちろん近代に入ってからの脚色であり、ちょうど日本が日清・日露戦争で、列強に伍する武力を發揮している時代の産物として、金太郎も武力を貯えた小さな英雄像のイメージで描かれたのである。

金太郎といえば、相州足柄山を誰しも想像するが、江戸時代には、足柄山に特定しているわけではなかった。今、私の手許にある近世江戸でもてはやされていた赤本類のうちの「きんときおさなだち」を見ると、主人公の金太郎に相当するのは、快童丸といい、信濃国上路の山

の山姥の子どもだとされている。信州木曾の山中の一角にも、金時山の名称もあり、越後国にもあるという。共通していることは、金太郎＝快童丸が山姥の子だったという説明である。

これを口承文芸の世界では「山姥の子育て」と包括している。山姥は、その基礎に里人の山人観が反映している。老婆のイメージよりも、豊穰をもたらす出産能力をもった若い女性のイメージがある。いつも出産のことを考えており、里に下りて来て、子を生み、ふたたび山中に戻って行き、子育てに専念する。

山中で子連れの山姥が、子どもと暖をとるため火を焚いている姿を見たという話もよく伝わっている。育てた場所に、姥ヶ谷、子生み沢、乳母懐などの地名が残っている。一方に鬼女のように恐しい山姥のイメージがあるのに対して母親像も広く、西南日本の山間部には伝えられている。

前出の「きんときおさなだち」によると、快童丸は稀代の怪力の持主であって、野獸たちを服従させ、山中で多

くの獸たちと遊びまわる。この情景は、里人たちにとって信じられないのであり、「山姥の子」であり「真赤な小僧」であるとその特異性が語られるようになる。山中の獸の王である熊と首引きや棒引きの力競べをして、これを負かしたとき、ちょうど猪狩にやってきた源頼光の家臣平井保介が居合わせ、驚天する。頼光は、山姥の子で獸を手玉にとる不思議な童を、召抱える決意を固める。

その間、母親の山姥が、金太郎をしつけるのであるが、猿、むじな、狐、兎など集めて力競べではなくて、ままごとや歌や踊りなどを一緒にしながら、金太郎を遊ばせている。その中で、刃物を勝手に使って手を切るなとか、兎やむじなと仲良く遊ぶようになどと母親らしくあれこれ金太郎に指図している。

静岡県下の佐久間町や水窪町には、山姥が次々と子を産んで育て、その子らがいずれも山の神に仕える修験者になり、後に山の主になったことを説く話がある。山の神の使者だとしてもっとも多く選ばれている獸は、狼あるいは山犬であった。江戸時代には、国産の狼が全国的

に生息していたと報告されている。明治三十八年に、奈良県で狼が射殺されたのを最後にもう日本人の眼前に姿を現わさなくなったけれど、山の神に仕える精霊の一つとしての狼信仰は民間伝承の中に残っている。とくに狼が出産と関係するという言い伝えは多い。狼が子を産むと、産見舞うぶみまひとか産養うぶやしないといって、わざわざ供物をもつて、山の神に供えるのである。山の神は女の神で、お産をするという信仰があり、その際、山の神に仕える狼が特別な役割をもっていたことが、狼と出産を結びつけることになったのであろう。山姥やまばなが山の神の変化へんげであるという予想があり、山姥の出産は、山仕事に關係する山民たちにとって、豊稜を約束してくれる重要な現象であった。そして狼の出産も同様に考えられていたのであり、とくに幽冥界から靈魂を導き出すには、超自然的能力が必要だとすれば、狼がその仲立ちをしたと思われたのである。

山姥から生まれた靈性のある子どもは、自然と山野を歩きまわりながら、精気を吸いこみ、自由自在に野獣と

戯れて暮していると想像されたのであった。

足柄山の金太郎や、信州上路山の快童丸にも、こうした山姥やまばなの神の加護をうけた子どもに対する信仰が十分にうかがえるのである。しかし平地に住む農民たちにとってみると、山中で山姥が産んだ子どもは、どうしても異常児に見えたのであり、山中での異常出誕の結果、超能力を備えて出現した不思議な童子という印象が濃かったのである。

江戸の絵本の中で面白いのは、快童丸が、遊んでいる最中に雷鳴が轟き大雨が降ったことを怒って、雷をわざわざ落下させ、木に縛りつけてしまうという場面が描かれていることである。かつて『日本靈異記』巻一に、天皇の側に仕えるチイサコベノスガルなる者が、天皇の命により、雷を地上に落下させてそれを捕えたという一件が記されている。この小子部栖こしよなる存在は、小さいが知力と怪力をもった小男として描かれていた。

金太郎や快童丸は、共通して、五体が朱のように赤く、産髪を四方に乱した姿で登場している。この朱色は

呪的な色である。また金の字を白ぬきにした腹がけをつけた姿からもこの童子が、並みの子どもではないことを物語らせているのである。そして多くの場合、鉞まさかりをもち、獣たちの先頭に立っているが、鉞が山中を歩く際に実用に加えて、魔除けの役割を果たしていたことを示している。

さて話の筋は、頼光が京から訪れて来て、快童丸に出会い、熊や猿を投げ殺す怪力にほれ込んで、家来にして都へ連れて行き、やがて元服して坂田金時として出世するわけであるが、元服と同時に、生き生きとした野生児の面影は消滅してしまう。つまり頼光の家臣として、世俗社会の構成員になり、その社会の一員として公認されてしまうからである。

童子は、神仏など超自然的なものに仕える特別な霊力の持主であり、本来仏教用語にもとづいている。童が若々しい力強い肉体をもつ存在であるから、子どもの時代に想定され易い。金太郎も童に特有のお河童あたまの童髪童のスタイルをしており、山の神・山姥に仕える童子が

一つのモデルであった。しかし山の神が女神でかつ出産する働きを示すために、山姥の産んだ子どもというように脚色されるに至った。

金太郎譚とは別に、有名な童子として丹波大江山に住むという酒吞童子がいる。彼は頼光に征伐されてしまっただが、山中の異人の代表的存在で、終生童子として生きていたことになる。ところが金太郎の場合は、山姥の子であるが、その本体は、山の神に仕える童子だったかも知れない。彼は成長するとともに、都に出て俗人として出世したのであり、同時に、世俗社会の一人前になって、童子であることを止めてしまったのである。

赤ら顔で、朱色の子という異端児ぶりは、山中の異人の姿をとっているが、とくに雷を捕えたことから、雷神の使者ではないかという説もある。かつて天皇に仕えた小子部こすべ栖軽の例のように、雷を捕縛することは、天神をコントロールする機能があったことを示しているかも知れない。

しかし一方では、幼童のイメージは、つねにこの世の

ものならぬ能力を秘めた存在という大人からの見方もある。都の人々にとっては、東国の辺境の山奥に住む山人の一族の中から怪力の少年を発見して、都へ連れて行き、俗世間で一躍有名にさせたという物語なのである。興味深いことは、山中で成長する幼少年時代の子どもの生き方である。金太郎は、自然に親しみ、動植物と共に生きる、人間本来の生き方を示した見本であった。たぶん大人にとっての子どもの理想像の一つなのであろう。

猿や狐狸兎などの弱少動物とは一緒に遊び、熊や猪などの強い動物とはつねに対抗して力競べをして挑戦し、相手を打ち敗り実力を貯えていった。力競べは一つの成長期の試練なのである。その結果獲得した力を発揮するのが、都への出世という契機であり、金太郎は、自然と共生する中で身に付けた能力を、世俗社会における武力に転化させて名を残したのである。この素材がお伽話や絵本、歌舞伎、常磐津などの芸能に使われて、人気を集めたのも、子どもから大人に成人する時に、その能力をいかんなく発揮した少年への期待が具象化されたため

あったろう。

もし金太郎が、成人期に機会を逸していたならば、大江山の酒吞童子と同じ運命をたどったにちがいない。酒吞童子は、山中で貯えた能力を認められないまま成長し、大江山の主になった。山と里の対立関係からいえば、里を襲撃し、里に災厄をもたらす、悪の存在になった。そこで文化の中心にある都の代表である頼光やかつての同類だった坂田金時らによって滅ぼされてしまう。

そして酒吞童子は、死後大江山の祭神になって代々崇りが鎮められるよう祭祀をうける身になっている。

しかし金太郎の方は、坂田金時になって、有名な武将として名を残したが、俗人であるから神化しなかった。むしろその子ども時代が懐しまれ、子どもの理想像の一面を示す存在として伝承されている。文化と自然、中央と周縁の対立は永遠の課題であるが、金太郎が子どものシンボルとして自然を体現していたことを、文化に属する大人はいつも確認したい気持があるのだらう。

(筑波大学)